

P3. 神戸層群で多発する小規模流動型地すべりの運動像

村井 政徳*・横山 俊治**・仲辻 裕美**

Masanori MURAI*・Shunji YOKOYAMA**・Hiromi NAKATSUJI**

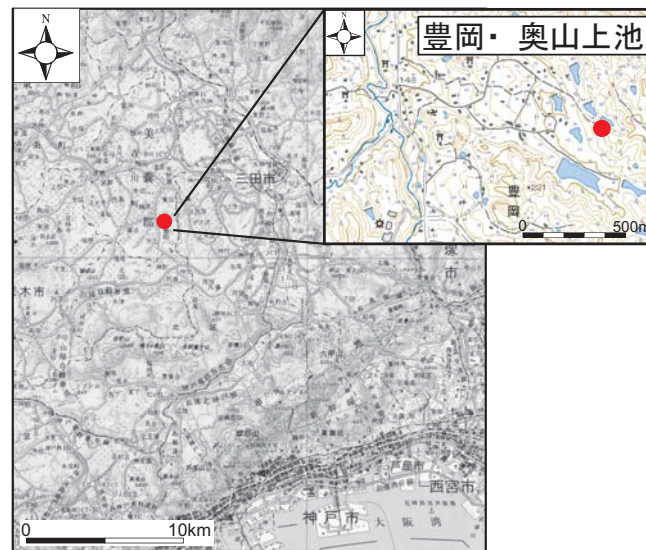
* 高知大学大学院黒潮圏海洋科学研究科
Graduate School of Kuroshio Science, Kochi Univ.

** 高知大学理学部
Faculty of Science, Kochi Univ.

Movement picture of small scale flow-like landslides occurred frequently in the Kobe Group



神戸層群で発生する小規模流動型地すべりは、きわめて狭い範囲で、明瞭なせん断面に沿って剛体が滑り落ちるというよりも、移動層全体が破壊され、流れできるように移動する地すべりである。



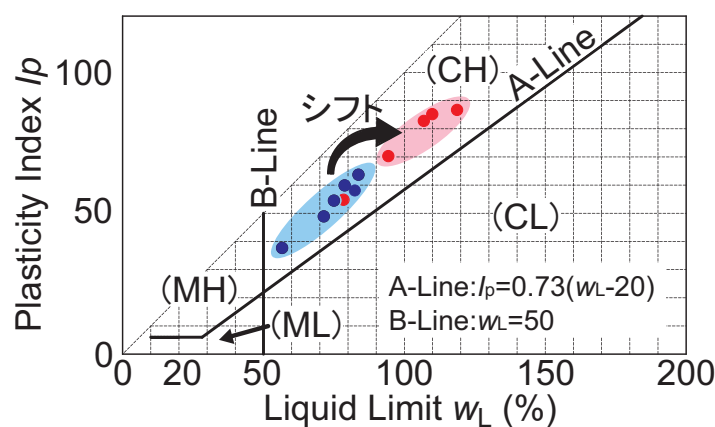
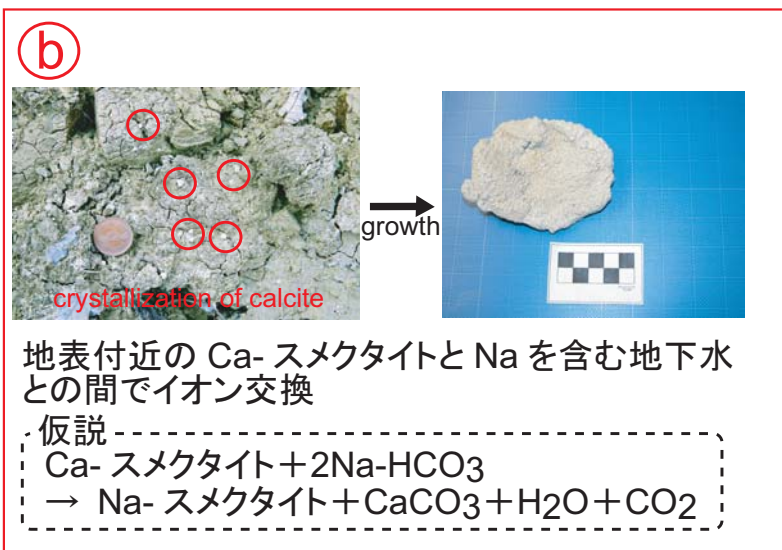
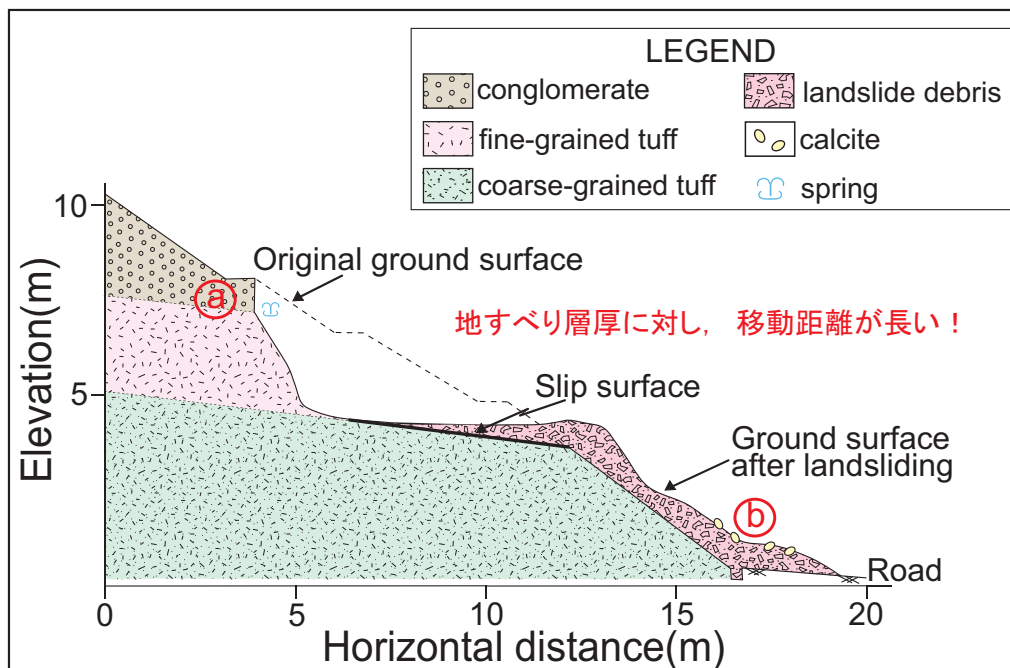
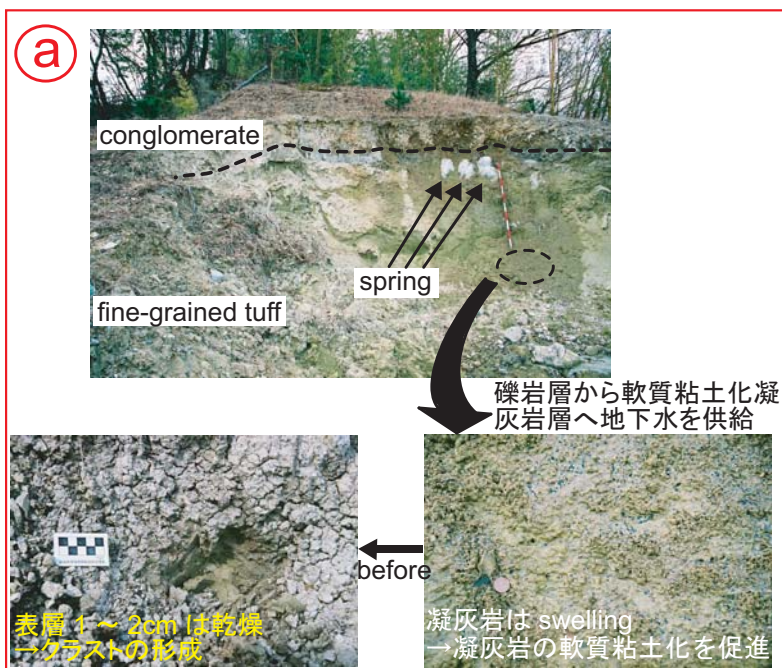
2003.11
小段を頭部とした高さ 20~30cm の滑落崖が形成され、表層部の数 cm が斜面にへばりつくように流下



2004.5
地すべりの輪郭は次第に明瞭となり、変形・移動領域もより深部にまで及ぶ。

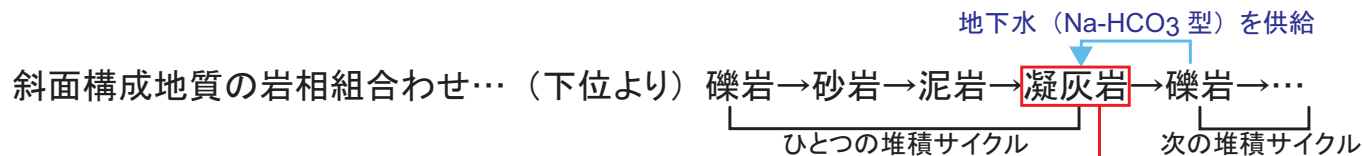


2004.12
台風 0423 号豪雨の影響で、斜面上に留まっていた地すべり土塊は布団籠を這うように乗り越え、道路面にまで達した。



地すべり発生前（不動土塊）よりも地すべり発生後（移動土塊）の方が、液性限界・塑性指数は高くなる。
→ 軟質粘土化凝灰岩層中のスメクタイトが Ca 型から Na 型へ変化 → 凝灰岩の強度低下?

【小規模流動型地すべり発生の要因】



小規模流動型地すべりの発生

- ・ 軟質粘土化の促進 → 強度の低下
- ・ 方解石の晶出 → Ca → Na 型スメクタイトへの変化 → より高塑性粘土